播州名所巡覧圖繪　一

ル 4
4734
1

抑業平の母のみこと遠くしあひ
しハくこゑかしはくすゝめいまぬ
といふ哥をよみたまひし明
石の浦風明くも乏秋のの
哥乃とかや筆ともまぶく
こよなう候えくかゝらさうまを

すまで難浪の芦風も、さながら
をもいては国中に名高き山水
しらるゝ事なく、いぬるはわかき所
は残る事なくこゝにしるさん氏
はせおそ人倍して播州名所
巡覧圖會として此書を編みす

ろしてまんの一きとゆきしの
口うそ無き海によりて道遠
振人浜くりして旅しにやまさい
旅客海山まゐくとしまさぶは
川海荒きもしらしる彼はいつき
に途中のしらべ慈力ならんと

こまかに稀なれは雲ゐにとゞろき
遠にして梶乃音のかれ〴〵にきこ
ゆるよしある婦か手すさひの
うきあはれをかしきさまをの
海士もしも世にしたかひつゝも
世にうかれ艶しき海にも先楽流
古れ年波をもちつきさるかの婦
ともまつしもの舟にて遊ひ
さる浦の林枝よもすがら夢
さうし婆海さうの浮浅うきあそひ
これひとへに森のうかしかはし
御の清水まもれぬ流御

ならもはしきまゝ携ゆかく
ゆかし志のふかきなれとし花
葉のおよびすゝむ和歌には
わかきとし錦繍の星霜の
平安にしてわれまれなりすゝむ
のつくる雅の椎柴のさかえ

筆と紙をもてやかくいふとし
享和の三とせといふ年は
長月菊下旬之日

冨小路正三位貞直卿

勉亭主人書写

凡例

一此書ハ一國一覧のものにあらず摂州より播州に至るの紀行を委曲せり行程の里数ハ記さずといへども巡路ハ要用の地名をあぐし連綿を

一宮道の左右に見ゆる所向在の名所ハ大抵二三里をかぎりて本文に連続すといへども山濱の標をなして分てり

一寺社并名所古説等の迂腰奇僻ハ其の実否を糺し妄説に似たるハこれを竊闕す但古書印板に載る謬説流俗の俗話佛説等ハ姑くさうひに圖して一員に備ふ者あり

一名所旧に変じうどもハ精筆成寿にといへども其意盡難き者ハ古書と参考して其象に希る

一古道の名所新名に混ぜしもの図ハ今に随ひ其理ハ文中に記を

一文中に式内神社と記せしハ延喜式神名帳に載る古社古宮と志るべし

一名高き草木或は石の類などは真の児戯なりといへども姑く習俗に從ひて出せり

一佛刹の縁起又は佛像の出現なんどは其原を探くせんがために多くは俗人の網に引とし等の数十に七八は除きて記さん

一大坂より播州界川までの間道は津國圖會に譲りてこゝに略せし所あり又闕るは補ふ

一出船は雑喉場よりなり西宮兵庫明石其便宜き所へ便船とすべし船路の記は後篇に譲りて爰に略す

一播州一國名區甚多し繁多なるにより後篇に譲り姑く此に略す

播磨名所巡覧圖會巻之一目録

神武天皇　雑喉場　浮海場　大仁村　北里村　佃村　神崎　尼崎鎮城
大物浦　逆橋の松古跡　浦の初しま　難波の里　同梅　長洲村　猪名
琴浦明神　武庫川　小松崎　押照宮
鳴尾崎　松原山昌林寺　幸寿丸の石塔　角の松原　感應寺
鷲林寺　六甲山　甲山　武庫山
廣田社　西宮蛭子　同構社　御前沖
宿河原　阿保山親王寺　阿保親王御廟　打出の宿　會津山
芦屋洋　湯本の薬師　鷲尾山城趾　鵺塚　猪丸古文旧趾　公光旧跡　葛葉屋敷
芦屋の里　同松　本庄稲荷社　西土木　田中　山路城趾　同湯
莬原住吉社　敏江屋　得男社　大海神　表筒男社　若宮八幡　尼神社　さゞれ石
仮殿　神宮寺　住吉川　灘乃浦　處女塚

新田義貞戦場　御影森　御影乃社 鶴ノ松原　御影石
石屋川　八幡社 二社　[illegible]寺　慶龍寺
東明処塚　弓張茶嶽　河内国魂神社　焔魔堂
摩耶山　赤松円心古戦場　求女天王祠　岡田庵
処女塚　敏馬浦　敏馬神社　敏馬古関
脇浜　法然松　阿弥陀寺　生田
生田山　生田池　生田若葉小松　生田川
生田浦　生田神社　城口標石　梶原二度懸 二ツ茶屋 神戸 走水
小野天神　河原兄弟塚　花熊城跡　三ノ宮神祠
多々部山　大龍寺　古城跡　小屋場
山路古城　安養寺　八ノ宮 六ノ宮　雪見御所古跡
天王谷　天王社　千鳥ノ瀧　温泉古墟

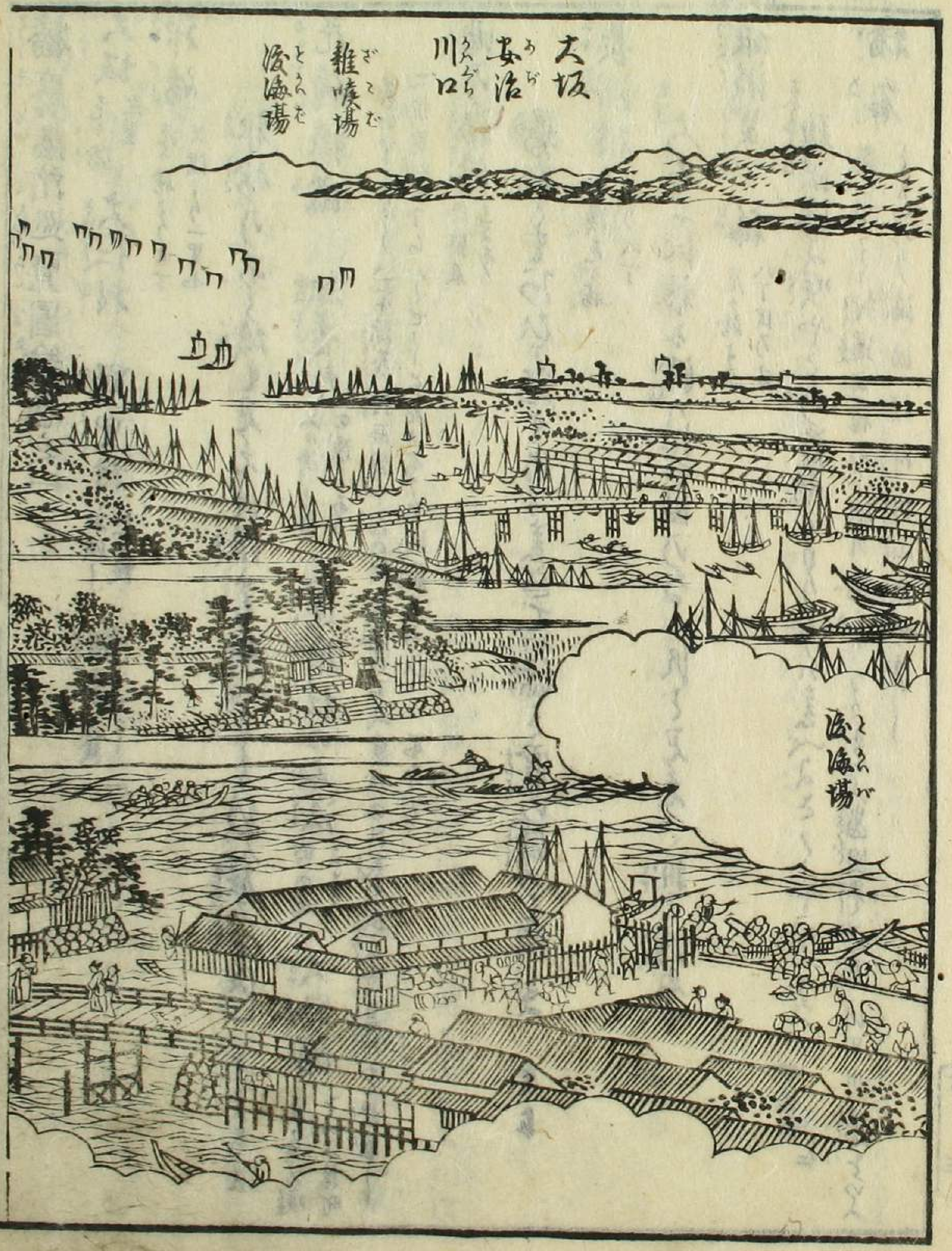
山路古城　安養寺　八ノ宮 六ノ宮　雪見御所古跡
天王谷　天王社　千鳥ノ瀧　温泉古墟
差方塚　清盛山荘古跡　廣巌寺　楠石碑 湊山
湊川　願成寺　小峯 桐岡の塔　夢野 旧跡多
鵯越　會下山　神馬ノ秣　兵庫ノ津
佐比江　経基墓　築嶋　築嶋寺
籞　魚市　七ノ宮神祠　輪田ノ岬
和田神社　蛭子 秋葉 釈迦堂　弁財天 新白ノ松　和田三ツ石
猿戸塚　燈籠堂古跡　本間遠矢濱　[illegible] 日入江
能福寺　真福寺　和田笠松
真光寺　本堂 開山堂 釈迦堂 一遍上人塔　琵琶塚　清盛十三重塔
須佐入江　八棟寺旧跡　萱御所旧跡　薬仙寺

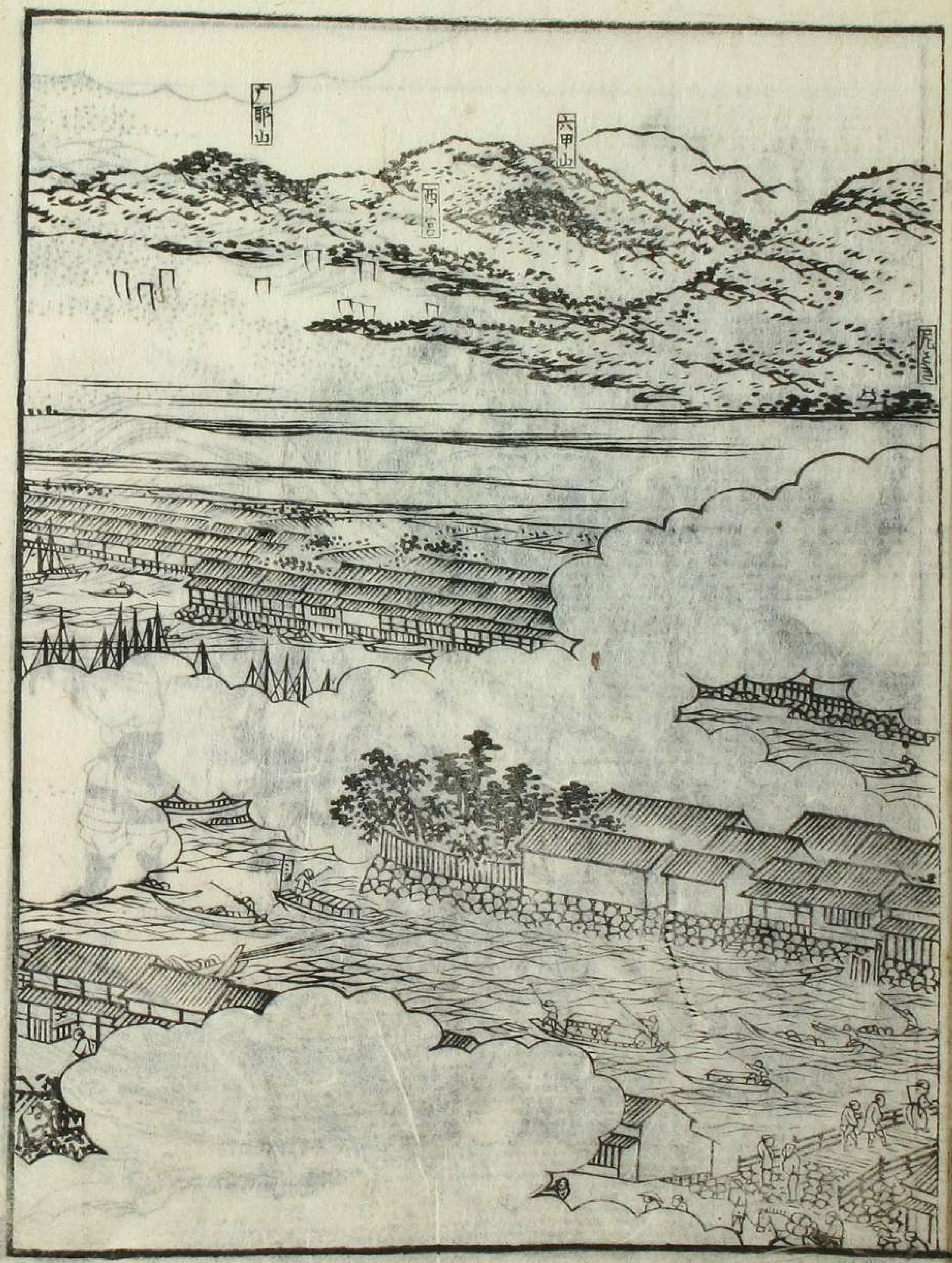
高砂乃左伊左古乃高砂
遠農邊尓多天流白玉
椿玉柳夫母段登豆佐無
麻之裳加止麻志毛佳東

千僧寺旧跡　魚御堂古跡　福厳寺　自然居士井
福海寺　二本松営　和田小松原　内裏跡
福原旧都　真野（真野浦　真野榛原　真野池　真野継橋　真野里）　知章墓
監物太郎墓　通盛墓　木村源吾墓　刈藻川

日本紀

神武天皇吉備國より和國へ帰向ひせ給ふ時ハ一人の漁翁海路を教き戊午の春三月難波の碕の奔潮太急に遇し故に浪速と号くと


大坂
安治川口
雑喉場
澱海場
澱海場


广耶山
六甲山
西宮

播磨名所巡覧圖繪巻之一

大坂 尼が崎三里 大仁村 野里村 船渡し八丁程 佃村〱

神崎 尼が崎より廿丁 天満より一里半

神崎のあら磯もみえず浪たちぬいつこよりゆかんよき路はなしに [illegible]

尼崎鎮城 船番所 入口渡し場の際にあり 燈籠松の古跡 町の内にあり 大物浦 尼が崎の濱といふ 檜町

家の中にあり 此所源義經西國下向の時艤宿の所又建武の比尊氏公御息所を供奉し 太佐國へ下らんとせしも此所にて纜維にあひし所なり

浦乃初嶋 同濱辰巳にあり

見ねともたびのおもひもかきては霞の浦のはつしま [illegible]

長洲村 同濱尼が崎より八丁

拾遺 人しれぬ移る流れ津の國のなからひとみえて袖ぞ朽ぬる

難波里 梅 尼が崎より八丁戌乃方

古今和歌集序 難波津に咲やこの花冬こもり今は春べとさくやこのはな 百濟國 王仁

猪名 しかり 猪名川を過たる 猪名川 此川猪名川ともいふ 攝州豊嶋郡池田川 遠くより 流れ 海 湊 沖 川 山 流れ 奇 數し

琴浦明神 東新田村淀城天皇第十二の御子 融大臣 左大臣より後従一位河原院にお知ひて塩竈をうつし 此所より潮を汲しめ給ふところや 祀ひ奉る 攝陂國に河原院

松風に浪の調ぶる琴の浦はかもめ鳴也あそぶらんなり 仲正

武庫川

玉葉 むこの浦とまりをしばしいさりする海士の釣舟波まよりみゆ 人丸

小松崎 鳴尾續き小松村の邊なるべし 八松 笛松 小松 此三ヶ所といふ

難波がたしほ風さむし波よれば小松がえだにむらどり鳴なり 勝明法師

押照宮 武庫川の西小松村より少南小社也 おしてるの名を殘とふ 武庫秀宮 日本記に孝徳天皇大化二年春正月壬午朔日賀正禮是夕天皇幸于難波崎宮云々 羅山文集温湯記に武庫秀宮は今云兵庫なりといへり 立の庫郡の内に古宮と稱するものは此秀宮ならん里人旅かなの宮と呼り

万葉 櫻花今盛なり難波の海おしてる宮にきこしめすなへ 家持

鳴尾崎 鳴尾濱 鳴尾浦 鳴尾沖 名をよめる歌多し

千載
今日こそは都の方の山の端も見えず鳴尾の沖に出でぬと　実家

松原山昌林寺
津戸村にあり　恵心僧都の開基なり

幸寿丸石塔
此所は多田満仲の御女びぢよ御方の所領にて美女丸の匿れ給ひし所なり　仲光が一子幸寿丸の首を多田よりつとにして持きたり此池のほとりに埋みしより風鉄と名付三月十日には此池のほとりにあつまる人あり　津門と書く

角松原
西の宮の町より二丁東

天乙女いかり懐紙の袖かくして津の〻松がおもふあかなる

感応寺
神尾村にあり　山号六尼山といふ　始めは神呪寺といふ　開山如意尼　本尊如意輪　紀世者弘法大師の他浦傳が崇と像の内に納む　旧記畧之

鷲林寺
武庫の山内にあり　山号は六甲山といふ　天長十年弘法大師開基　本尊十一面観世音の像と安置これあるところ大師彫刻の霊仏なり　天正年中信長公放火によりて伽藍及び宝物旧記悉く焼失して今僅に草堂を結びあるを残して村人是を守る

六甲山
武庫の嶺きよりなる郡唐櫃村より山内へ皆武庫六甲の山内也　高山は仲哀天皇先后大仲姫の皇子かごさか王忍熊王天皇崩じ給ひて後神功皇后と悪くて兵を発し三韓征朝を後皇后これを知り給ひて武内の宿禰とつかはし軍兵叛城王及び又人の鎧冑と兵をして山頭に埋む　其甲首をうづみ給ひて六甲山といふ

甲山
右につゞき武庫六甲の嶺と並ぶ　其山内に甲のごとし　四方同面にして面向不背の山なり　あるひは又いふ　基僧正毘陽寺に居て毘陽の大池を築き給ひし時其堤を築きたまふより御池ちかくもいふ

武庫山
すべて武庫郡をさせり

夫木
ありま路や濆出づくれば雲かかるむこ山さへぞ今霧りけり　公朝

廣田社
西の宮より北廣田村南の方ばかりにあり　これより三丁ばかり　二十二社の内廣田八幡宮　神功皇后の御幸なり

又又座の説所謂　一殿住吉　二殿八幡　三殿廣田　四殿南宮　五殿八祖　毎年七月七日神輿あり　此日神宝を出し諸人に拝しむ　八月十八日後の神事　氏子是を祭り当社とよめる歌

新続古今
今日まではかくて蓄し津の国をいかでめぐらす廣田の神にまかせん　六条入道太政大臣

西ノ宮
播州武庫郡之兵庫より又里　此所戎殿ともいふ又百社多し　御宮は西の端なり　世に西宮と称し夷子とも御神のいふ　桐殿二座　左大巳貴命　右事代主神　日本紀に曰伊弉諾伊弉冊尊の御子なりと云云

神代記に曰第三の御子天照大神の御弟にて三歳に至るまで御脚立ざるにより天磐櫲樟船に乗せて順風に放棄給ふ　此所に流れ寄らせ給ひしを網する夷拾ひ上まゐらせて宮ひかしづき後此西宮に祭られ給ふを蛭児の宮と崇め奉るなり　されば二神の尊三男と崇らせ給ふ夷三郎とやいふ　又海を領る神として漁人ども尊び給ふ　又世にいふ表とおもてに三とせにして足立給ふ

又源氏物かたりあかしの巻に
まつ河海のまうちられ蛭の子の足立さりし年は経にけり

攝社　若次社　鳴津社　岡田社　須川御前
沖恵美須社は西宮の外田圃の中にあり

毎年正月九日神拝あり蛭子尊廣田の社に鎮幸ありし時人倫のこゑを忌給ひける諺を以て民村門戸を閉て外へ出ず居籠の神事とて諸家戸を閉ひて社参は世俗十日恵比須といふ又正月十日八月廿二日神事あり又正月門松を立ることなし此里の風俗也○此所名氏都藻の附新田義貞陣所なり
○推古天皇九年三月聖徳太子はじめて売買の術を教へ蛭子の神に祈ひて商売往還の神としれ今に至びをを商神として諸商人崇めまつる此時よりはじまる

拾玉
西の海に風ふかせよかしのこやあまのこやゑびを三郎　慈鎮

廣田歌合
ちはやふる神にも夷ぶるもの〳〵あらたなるもの〳〵表まゐる　孝政

御前沖　西宮の浜蛭児の海をもいふ此所は神功皇后三韓を平げ給ひて御帰朝ありし船を此浦に寄せ給ふ今廣田の社則是なり其海邊を御前沖といふ又廣田の郷に御船を繋ぎ給ひ止まりませし故に此邊を武庫郡と号く神功皇后の兵具を此地に埋ませ給ふとも又異国御退治の後よりいふ

千載
ちはやぶるかみのまへの沖を見渡せば雲井にまがふ沖つ白波　教実

官河原　西宮より一丁余西にあり むかしの蔓僧集りて九品の念佛をはじめて在村にて莬原郡山となしく官河原といふ其跡なり
つまらかるとも
○建武年中留山阿波守国清湯乃ゆより山城に出る陣所なり

阿保山親王寺　打出村の内にあり

阿保親王御廟　右打出の上手にあり
○兎原郡莬原の辺左馬頭在原業平朝臣

阿保親王は仁和三年平城天皇第二の皇子三品弾正尹従一品贈在原行平朝臣の御父にてまた流乃とき此廟を遷させたるよし

打出宿　兵庫より二里余打出の浦の一村なり

此浦むかし神功皇后三韓征伐し給ひて築紫に帰り給ひ皇子生れ是則第三の御子
應神天皇是なり八幡大菩薩
于時第一の皇子麛坂第二忍熊皇子是を悪みて軍士を以て此浜に集めて船を繕ひ皇后是を細見たまひて南海に廻り帰給ひし給ふとなり皇子の軍卒打出るとて打出乃浜の名ありとぞ 歌名所打出乃浜を近江なり

金津山　打出村にあり小の岡山なり阿保親王此岡山に葬ひて金の尾一万黄金一千枚を埋ませし此里飢饉に及ぐん時是を掘出して用ゆるとなり是より金津の号あり俗傳に三十一字を以て是を伝ふ
朝日サス入日輝コノ下ニ金千枚尾万枚・下五文

芦屋洋　同浦　同里　同灘

新古今　あしのやの灘の塩やき暇なみつげの小櫛もさゝれきにけり　業平

徒歌多し略く

湯元薬師　同本三条村の西にあり塩通山といふ中昔ハ有馬の温泉の塩ハ餘れ流れ其源の湧出るそ南海より此芦屋の浦に引通ふといひしハ有馬温泉山の温泉坊月並薬師として此る像を拝れ後世加鉦破壊して今は堂もとるりてむかしの松のこるのみ

○鷹尾山城趾

鵺塚　芦屋川の東御影の下にあり

近衛院の御時源三位頼政矢をもて射落されし化鳥は艫船に入れて西海に流れし此芦屋の浦になかれよりて止まる浦人是を見て塚に埋むといへり

猿丸太夫　公光旧栖

故業屋敷　古跡村の内にあり　昔芦屋の里及び近郷七百余町の領主藤左衛門尉病の床に臥して一子月若を伯父故業が猶子となしてお後のことを遺言して終に卒る故業後は遺跡悉く横領せり因て月若孤独の身となりまて光明寺へ入る時より諸国を巡りて貪狼放逸の緘後を禁しむ依て月若是を所へ故業を

名所

糺問して其邪を改め本領を与へし給ふとなり

業平朝臣假居古跡　此芦屋の里ハ紛平御領地なりし在り業平御も時々往来の所なり

新古今　晴る夜の星か川辺の螢かも我住かたの海士の焼く火か　業平

葦屋里　御名の小山添の村也　あしや川

續拾遺　かのくに我住方ハ霧こめて芦やのさとに秋風ぞ吹く　定家

同躍松　深江村西なる道にあり昔此所にて森村の稲荷祠をまつりしが此御神といへるハ此る所也

本庄稲荷社　森村にあり　昔此神祠深江村の海邊に流れ止る森村の民宅よりこれを祭て村民睦しき群となせり故にて民名なる氏神を攘りへるゆゑ神を迎へ森村に社を建て本庄の庄中民神と崇め祭る　毎年正月朔日神拜あり

西青木　田中　此邊村くを云る此の庄とて此債海近く湖を湛て湯となれ　詞花集歌の詞書に出づ

攝磨守にて侍りし時三月計に京より侍りける津の国

源定房参議なる朝臣湖湯あるて侍るときてつかはしける

詞九　みやこには散るも咲ぬらん我も何なといそぐ出船ぞ　平忠盛

山路城跡 片町より西山の方田の中に礎あり此所赤松信濃守範資家臣斎藤又郎則実籠城の跡なり　　**月湯**

菟原郡 東は平寺国より西は生田川南は海中に限りありて北は山中にあり伊勢物語にいふあしやの里なり

菟原住吉祠 住吉村にあり 延喜式 国幣 田中 片町 住吉 横屋 魚崎 西青木 共にこれを産土神とす山路の庄といふ ○社域西上にあり

祭神四座 天照大神 八幡宮 神功皇后 住吉 摂社 素盞 諏訪

住吉表筒男中筒男底筒男の三神は神功皇后三韓を伐せ給ふ時の軍に従ひし御神にて御凱陣の時皇后に誨へて荒魂を長門国山田に祭らしめて明年豊浦宮に移し給へりそれより海辺二十二社を勧請し給ふ其一つなり又大坂の南に祭りしは和魂なりとぞ

○境内に 細石 大海神祠 神宮寺旧蹟 若宮八幡 御崎浜等の名あり

○此村東北より摩耶山の道ありて又十丁許之 ○八幡 ○若林氏宅 ○蜜柑 ○五毛天神等檀魔堂までの間にあり

住吉川 源は武庫山より出て魚崎に至りて海に入

灘の浦 大抵菟原郡の海辺をいふ 住吉より生田川に至るまでを大灘といひ住吉より芦屋の西の宮に至るまでを中灘といふ浦口は舟を泊るによろし芦のやの灘は伊勢物語に出たり郷音の灘は下に出す汲の濃干は見かね

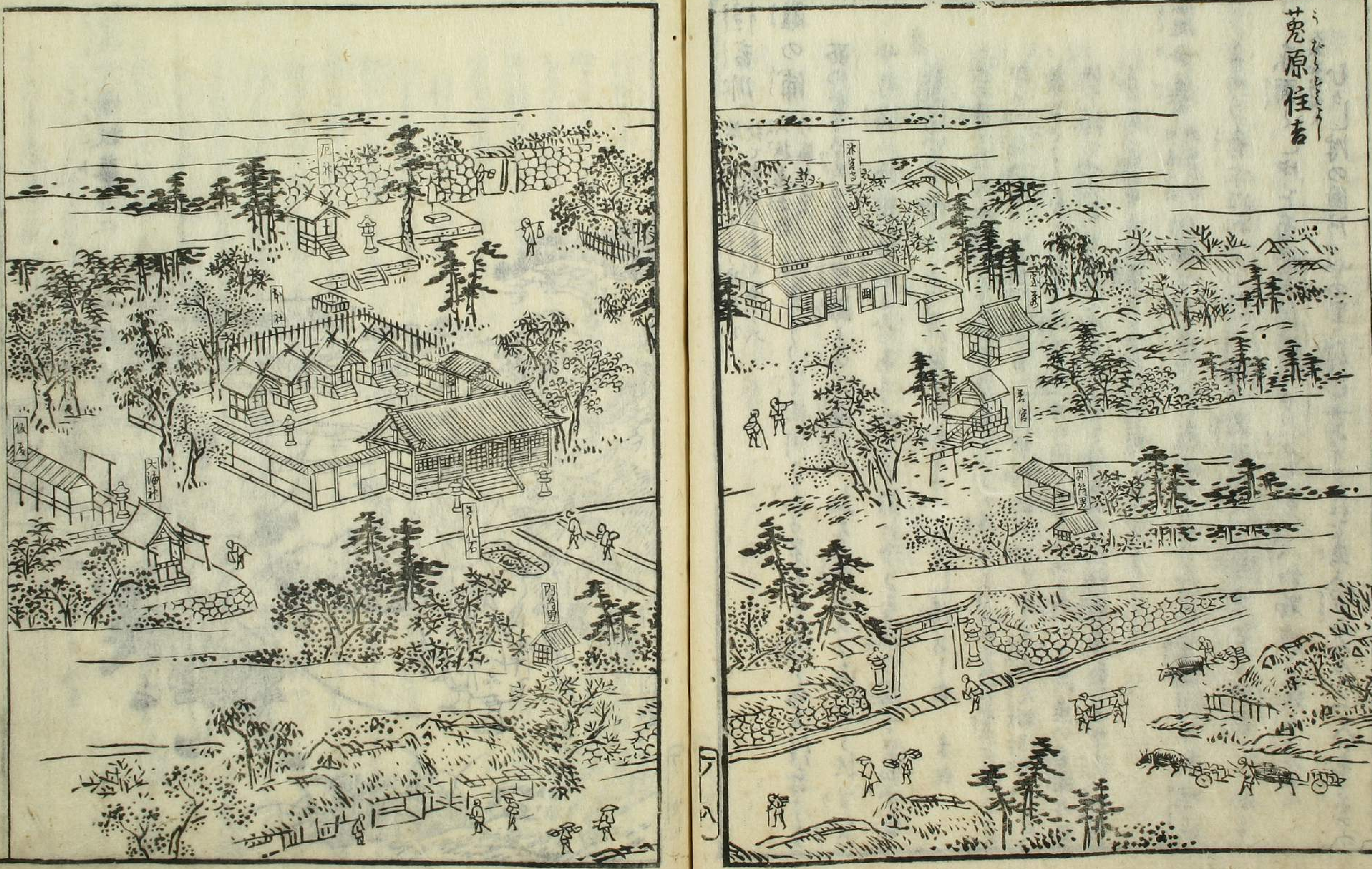
六帖 春風のいたく吹らしおぼつかな海士の釣する小舟さし帰る見ゆ　素性

○或日灘とはおほの端くてはるかき所なる瀬といふは浅きをいふなりこれが家を灘といふ八西に淡路島ありて東は川口南に紀伊阿波の鳴戸あり尾崎大物鳴尾芦屋の庫などより南をさせば淡路紀伊の間トモガシマの二島より淡路の南浦の間海を経て鳴戸に至る又鳴戸の南を経ぬけて紀州浦の西南をめぐりて東武三までなど皆走水の聚るさかひなれば灘といへり

處女墓 住吉の西御田村にあり 此塚三つあり一つは東明にあり一つは生田川の東味泥にあり各十町又丁を隔つ塚の周囲各八十余歩之東は西表とし西なるは東面とし中を南面とし此故すは万葉集大和物語に載たる女之

大和物語云 むかし津の国にすみけるあしやの里に住む女ありこれを恋ふ男二人あり一人は菟原の

菟原住吉（うはらすみよし）



竹田男今一人はつの国の茅渟の壮士といひける此男ども年の程顔かたち
心ざままさりおとりなかりければ女おもひわづらひてかの女の親や生田川のほとり
をうちてかの二人の男をよびていふやう此川に浮てゐる水鳥を射やうさ
に射ぬらん方へまゐらせんといふ男どもいとよき事なりとてこれをいるに一人は頭の
方を射一人は尾の方を射るかくてむすめ何といふべくもなかりければ
住わびぬ我身なげてん津の国の生田の川は名のみなりけり
とよみて此川へ身をなげぬ二人の男もつきて同じ所へ身をなげ其母まんね
親いみじく悲みてとり上げ葬りぬ男の親やども来りて此女が塚の傍に
塚を作り埋むられ津の国の男の親や云やう同国をこそ同所に塚をせめ他の
国の人いかでか此所の土を犯すべきやと妨げるに和泉の親やがてつりより
船して土をはこび終に埋めける此塚に黄楊の小櫛をうめるは生つきありし
今の世までも土のまゝになりたり云 ○此三人の塚あれが味泥ちらぬ男は同国
を菟原男茅渟男を處女の塚といふ
○或云つれはし此あたりの地名此ひとつに古き名の如きモトメともいへり東瀬
をタウメとて即ちゆふの潮諸とまうし万葉人丸の歌に
玉もかる処女をすぎて夏草の野島がさきにいほりせりわれは
万葉集處女塚長歌略

處女塚故事

遠き代にかたりつがんとをとめ墓中に造りおきをとこ塚こなたかなたに造り
おけるゆゑよし聞てしらねども新喪のごとも音なきつるかも

反歌二首

あしのやのうなひをとめが奥つきをゆきくとみれば音のみしなかる

つかの上の木の枝なびけりきゝしごとちぬ男にしよるべかるらし

同葦屋處女墓をよめる福麿の長歌略

いにしへのますらをのこのあひきほひつまどひしけんあしのやのうなひをとめの奥
つきを我たちみれば長き世のかたりにしつゝ　略

反歌

いにしへのさゝ田男のつまどひしうなひをとめの奥つきぞこれ

此三ツの墓の事を輿地志には三陵と録して大馬鬣封之此皆上古の荒陵なる
を騒客文人俚諺を採りて遊戯の文藻をなせりといへり

新田義貞戰塲

楠正成討れ給ひしかば新田足利の國争ひ今を限りとぞ見えたる足利方勢
を三手にわかちて三方より義貞を討てかゝる義貞朝臣御方の軍勢を落延
させんとて小勢陣にわかれ返合せ〳〵戰はれけれども義貞の乗給ひし馬に矢
七筋まで立たる小膝を折て倒れたる義貞求塚のほとりに立て乗替の
馬を待給へども御方に是を知る者なし敵是を見知りて討んとする所に義貞の勢
に睥睨して近くはよらず十方より遠矢に射る矢は雨や霰の降るよりも尚繁し
義貞は太刀二振左右の手に抜持てさがる矢をば飛越へ上る矢にはさしうつぶき正
中に射る矢をば二振の太刀をならべて十六までぞ切て落されける其ありさま只天
王の放つ矢を遮り勝負の如くして返るらんもかくやと覚ゆる斗也小山田太郎高家
遙の山の上より是を見て急ぎ諸鐙を合せ馳来り己が馬に義貞を乗せまゐらせ
我身は後に立て返しくる敵を禦ぎたるが数多の敵に取籠られて終に討れて
けり其間に義貞朝臣虎口を遁れ給ひける高家が義貞に替つて討死とげる志氣義
貞西國の討手を承り給ひて播磨に下著の時軍法に田畑の作毛の一粒も刈取る民
家追捕などをする者禁制に於るに高家軍中の粮一粒もなかりければ止む事を得
ず青麦を刈取て兵粮に搆せしぞ帰りける附の侍是を見て諫せんとしに義貞の家
法を犯せし戦ひの為に罪を忘れるなかれしとて田の主には小袖二重を与へ家に
粮十石を副て送られける高家其情に感じて終に大将の命にかはり戦ねる人
でこれをとがめざらんや

御影森

石屋村の東にあり

御影社

林中にあり

○雀松原

續古今　もろげのもり川を

ちかふるが御影の松と宿まうでてちはじめしちとせまでおひて老ぬん　基俊

御影石　兵庫莵原の二郡の山谷より出て村用の上品とし海道の御影村石工多く是を物に製し積出す故に御影石といふ今石の出る所と御影山とはへだつといへども古名なり
あるひは西園寺殿の御影をうつしたまふ故に城州加茂あふひを採りしより發りて是を名とすといふ
元は山は海岸ちかく浜には磯も洪水に埋もれ石も口山は至高にて奥深く左右に石や
村より車に牛をつけて御影に出せり石工の用葉石とらへる大雨の時石屋川へ流れ
出るを拾ひて其辺に積売て悉くなし

石屋川　一名徳井川　源は武庫山より徳井を経て東明より海に入

八幡社　二社並ぶ一ツは八幡村にあり天正廿年改葺とす一ツは河原村にあり渡部村の氏神とも舟寺八幡ともいふ

舟寺　一名神宮寺八幡の傍にあり　文明の頃の古寺なり

類林和歌集　舟寺に侍り寺の名を聞て詠む歌を

これも又のりの船にや乗らんと舟寺に寿と名にかけてうまるらん　俊頼

慶龍寺　篠原村にあり摩耶天上寺の子院にして文明の古記にも見えて篠原寺といふ此寺の麓荒れ世の菟原の菱田といふ所にあり

東明處女塚　これを処女塚といふなり
東明村の北にあり古へ此所の処女を葬りし墓といふ

△弓弦羽嶽　一すじの谷も名の面白きとあげしのちはふもとより強て渡り分てもなし此山の峰を三つの峰と云

大石川　一名都賀川　源は武庫の山谷より出て川原森村大石を経て海に入
川の西大石村にあり

河内國魂神社　胡麻生村にあり式内の大社也今五毛天神といふ上世の神なり
ともいふこれより處女塚へ三丁計　篠原　𡸴䰠堂へ三丁計

𡸴䰠堂　上野村にあり八部郡山北へ十八丁海道川原村よりみあり又岩屋村よりも十八丁

△佛母摩耶山切利天上寺　上野村𡸴䰠堂より十八丁坂路三ツあり七まがりといふ二王門より門内外の石階七段都合二百十級あり海路は
山頂は播州一望に見わたし大海を庭にあり海路は遠のちりのまがりし村里は一握の粟のごとくなり
て古義の真言法道仙人の開基は天竺法道仙人なり
楓聚久米仙人都良香等の連綿は仙人の跡は當法華山の系にして
孝徳帝の御宇法道仙人
なり釈迦切利天へのぼらせ給ひし義をもつて切利天上寺と号け佛の
母摩耶夫人を安置せしより佛母摩耶山といふ

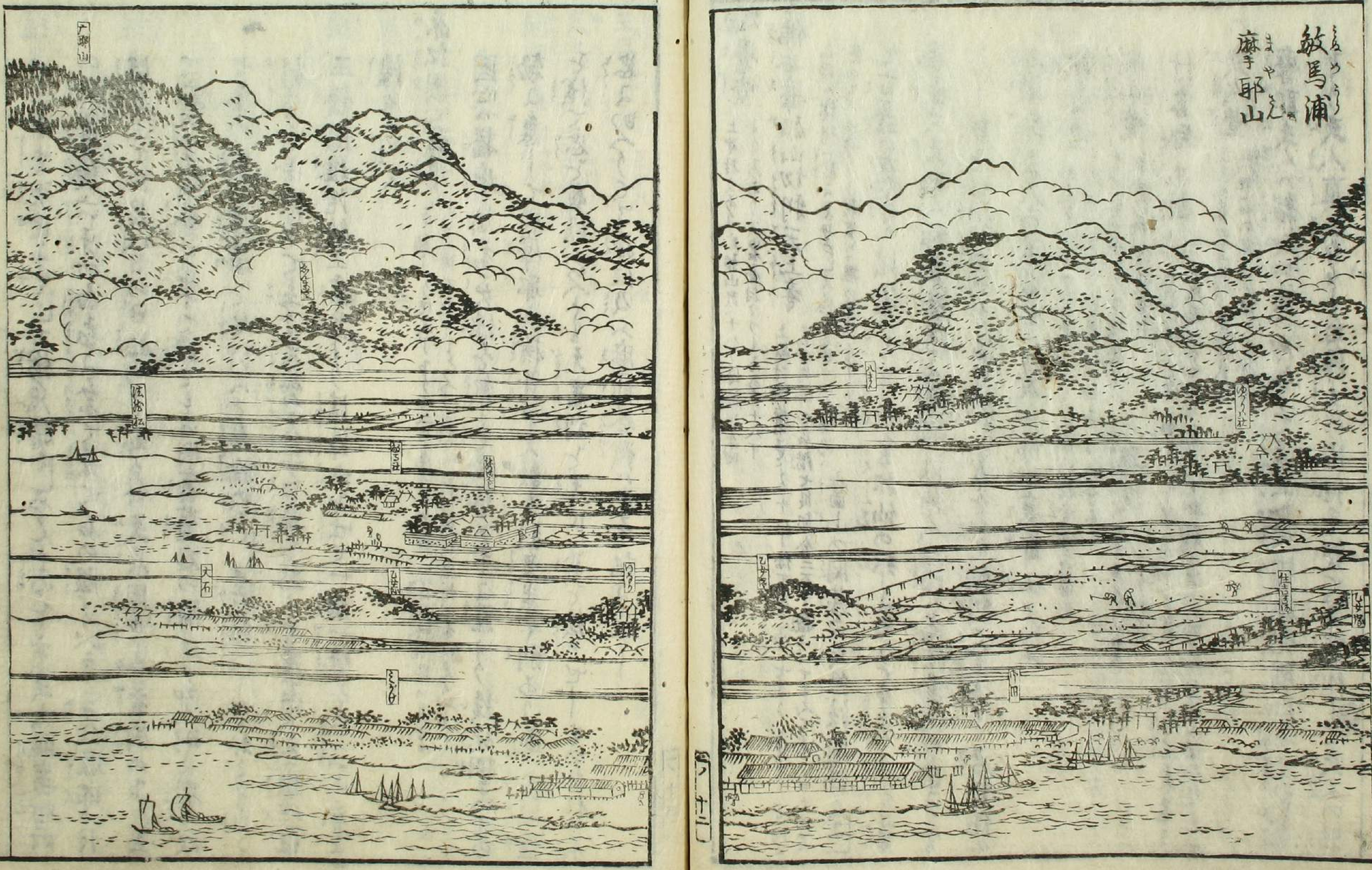
觀音堂　夫人堂の左にあり長一寸八分又闍浮檀金三寸の像を
胎中におさむ每年二月初午の日法會あり

開山堂　夫人堂の右にあり法道仙人
弘法大師を安置す

什宝都丸面　山下上野村聖王寺にあり一面は丹波梅若大夫にあり聖王は南都郡の能に出勤して面をうけしとなり
○**奥院**　五丁斗登る大きく塔の

○夫人堂　山上の南面にあり長六寸又釈迦右の脇より誕生の像あり

摩耶夫人は釈迦如来の御母にして天竺迦毗羅施兜国白淨王の妃なり
まう夫人真正なると白淨王の因縁を観て菩薩化して夫人の胎


敏馬浦
摩耶山

中に下生現世に生じて俗の胎をしめんがためとぞ夫人眠寤時
の間菩薩六牙の白象に乗て来て右の脇より入ると見へ懐胎十月
満足して四月八日の日始めて出る時夫人園中無憂樹の下に立
て右の手を挙て葉を摘とる時菩薩右の脇より出る時に樹下に
七宝の茎の蓮華を生じ大さ車輪のごとし菩薩其上に堕ちて自ら
行事七歩にして立つ大梵天王白拂を持して左右に立ば難陀羅
王優波難陀龍王虚空より清浄水を吐て一温一涼をそそぎ子の身に
灌ぐとなり云々

赤松円心戦場

（本宮より北へ一丁ばかりにて二の尾の谷の谷、宝大畠瀧塔の立る所をいふ。今不分明。円心又一説の場所は播州の赤松に在るべし）

円心は播磨佐用荘の人にして威勢天下に輝き後醍醐天皇の
勅に応じて此摩耶に楯籠り大敵を引受悉く利あり遂に六波羅
を伐て忠を盡くすといへども元来利を先とし義を後とせしものなれば不
忠にかへりて子孫の及ぶ摩耶合戦は太平記に委し

王子神祠

（原田村にあり文明の社記あるといふ）

朱雀天王祠

（うちや村にあり文明の社記にありといへ）

大石村

（大石川の西の海邊 此所に酒造家多し）

開円庵

（うちや村にあり）

庵に元亀三年の日記あり又法華経あり其跋に曰く
應永二十一年中元の日功畢、貞和三年五月廿六日東山の朴翁慈音
に授く。康永三年二月中旬正六位弾正忠藤原朝臣師範施入（津国志）

處女墓

（味泥村にあり三基の一つなりといふ 三墓）

敏馬浦

（石屋村脈濱八田部の海濱に亘れり）

萬葉
玉もかるみぬめをすぎて夏草の野島が崎に舟ちかづきぬ

（野島は淡路にありて此浦に向へりての歌 拾遺集に敏馬をとしまとせしは誤りて讀経る旧名あり 敏の字を通ず）

新續古今
わかめよし里のあるべし向ひてみぬめのよそに入る波かな　定家

敏馬神社

（岩屋村の林中にあり松林波に濱ぐ 今三社と称し岩屋大石味泥の産神）

延喜式八田部郡汶賣神社とみえたり此社は元敏
馬郡敏馬山にいませしを神功皇后船を造りて功ありしは此神の加護なりとて此
ところに祭り給ふより浦の名となれるといへり

敏馬故関

（山岩屋村にあり）

此関摂津志に初る其古歌みるものをまとめて始めて後ひ

てそよ是を考ふるに関はいにしへ国境にありて出る旅客をあらため入を禦ぐ為之古歌
に須磨の関をよまるゝは今も当国より播磨をさしていふにへの
国界にてありしか尚考べし　和名抄に播磨の郡に播磨国大和田の泊にみえ
兵庫のあたりや今古国界沿革も多きものなれば先須磨の関より古きもあれば

脇濱　岩屋村の西にあり　此辺五ヶ村名産多し　酒　茶　菓　又舟車多くして繁森
揃餝　茎藁を用ゐ捨る水源遠き不山は覚えてあそび長くまりて人屋の
ここに並びて其下を往来するもの多くありしより其の水車新田には多く池と

法然松　脇濱にあり法然上人左遷の時風待などの縁なるべし
縁るなり

○阿弥陀寺　同村にあり法然上人帰洛の時やどらせ給ひし所とぞ

生田　生田は郷名にして其中の
ふるさとを生田川といふ　生田二宮　川の東にあり生田明神八社の内なり

生田小野　百韻一名里池　達磨百首　舞ねるも生田の池を見まほしく　生田池　生田村　廣さ三
衛府の左右山にむかふ今小野坂といふ　又は坂本の末のまとひも今は末をさせり　家隆
堀川百首　聲なき人の名さまさげに摘むもの生田の小野の若菜之名り　師兼

中尾村の人毎年生田の濱の海藻を採て京師に献ずるを生田の若菜と云
或日本紀集深藻をよむ不是洛之摂津志に七名の其一とするしに誤りなり

生田川　森より東衛府の川なり源は布引の瀧より生田の社の東を経て郡界をなりて海に入る今
夫木集　梨の木びぬらぬのまもらずをおかなくに生田の川の名をやすけし　通経

生田山　生田宮村の上方にあり一名大輪田山
山中に瀧流あり甚ざ源掛なり

生田浦　六帖　風ふけば生田の浦乃いくそびらかへりて心をよせにたえんもの　内侍某

生田神社　生田宮村にあり式内の大社也延喜式二十四ケ村　これを生田森とも名付る　七月三十日　八月廿日　生田森　社地をいふ　とよの名所也

祭神　稚日女尊　○摂社　住吉　八幡　諏訪　日吉　末社　天照大神　稲荷　和歌宮　雷大臣　猿田彦　弁才天

裔神八前　もとは城外にあり一の宮は小野村にあり二宮は生田村三宮は神戸村四宮は花熊村五宮は宇治野村七宮は兵庫小濱町六宮八宮は坂本村にあり

いにしへは活田川のほとりにありて生田長狭国と称し海上五十狭茅を祝とし
もとより今も村長海上氏とありて神楽を奏し神事を供奉せむ
和田の岬へ守なりしといへり○或日廿一代集に此宮を社に神とも詠るゝ
としても森即社のうちそ杜の字の論あり○祠前出埼甚長く波打際に至る
毎歳競馬を建るより森より先まで大抵に丁許皆八重の桜並樹を植へ花の盛
りは波の花ならぬさくら海祇のかざしと傍に春光異所には勝たり

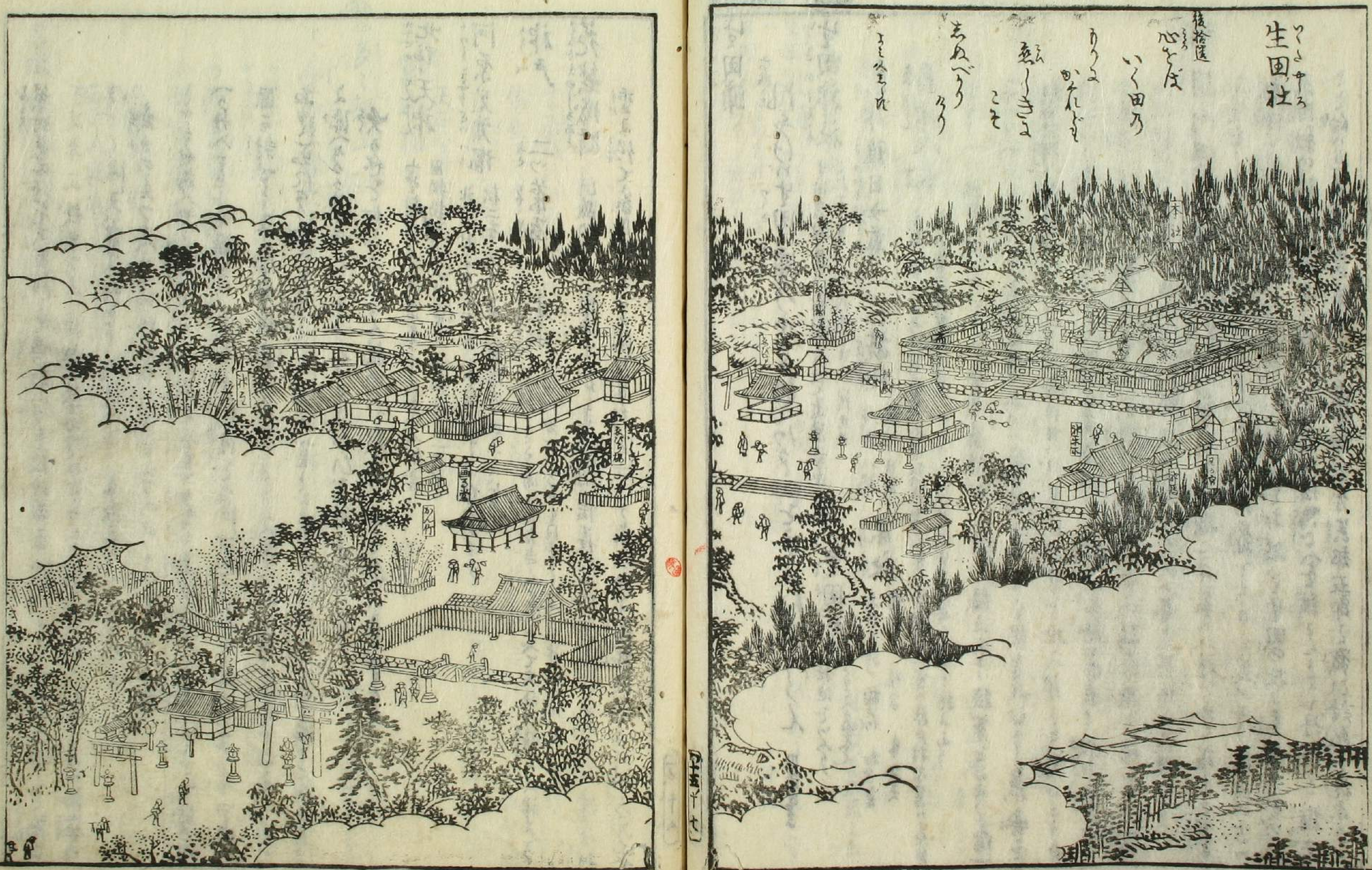
城口標石　来　梶原二度懸の梅　生田の二町西　小獄が村の西　平家生田森の標之平家は八陣を出て梶原の旧塁
に据置し西は一谷を城廓とし東は生田の森を大手と定めたり源氏の方は
義経を始めとし三草山の蕨村に平家を打破て生田の杜に責近付崔の松
原御鞍の松昆陽の方に陣して一谷の後鴨越を越さんとて丹波より鵯越へ
こそ向ひ道生田の先陣は川原太郎兄弟私市五郎と戦ひ討死を梶原平三

生田社（いくたのやしろ）

後拾遺

心をば　いく田乃　もりに　かくれども　恋しきに　こそ　志ぬべかり　けり

よみ人しらず



景時是を守て又百騎にて出向ひてくもば次男平次あまりに先をかけんと勤る
を父平三使者を立て後陣の勢のつゞかざらんに先かけすゝんでものは勤進み
まじくよし大将軍の仰なりといひ送りけり平次志ありし人にて
武士の是につよくするわげひきくては人のちへともいふのかは
とかさせ候へやと思ひきりけれ父平三是を見て平次討るゝ者どもどこぞ城の内
へかけ入りしも源太のゝみえざりければ深くとみし先がけせんとぞしもせ乙ものゝあれ
源太討せて平三が命何かせんくへせやとて又走てかへし彼の源太がたる命を見て
打出し出たり梅こそ梶原が二度の駈とぞ中たなりに咲乱たる梅がえをえびら
に挿へたるが箙に花の散たれども香ひぞ袖に残りける
咲かゝるを何つとひなん梅の花散来る身ぞ香りはまさるなる

北野天神 中村にあり治承年中入道大納言因綱勧請したまひり菅生田為神の一ツなり

河原兄弟塚 神戸村より三丁斗東畠の中に塚の志るし松二本あり此の所ハ戦場の画上にたり

神戸 **二ツ茶屋** **走水** 三村つゞきたる所にて大き人家ならべて大社の侍ち足ち神戸とカウベカンベツキも同じく号し八神社の神久地なり

花熊城跡 此城のうつハ永禄十丁卯年織田信長公の御意として荒木摂津守村重に仰て家居也口守一志島を専らとして一ケ年の内に成就に及ぶ御るの時

又北の口も二方之堀なれハ西の口之元亀元年荒木志摩守村正これを守る天正三年まで居城し志摩守子細あつて藝州毛利家へ加わりしより又あつ一志滞一年中居城にて此間に大坂門跡籠城のうちに付西国の門徒等より兵粮運送すると
信長公是口に従て是を阻む郡軍ともにまに此口ハ持ちきたるも後紀州の一揆雑賀孫
市根来の渡辺彦左衛門此城に籠りたるを池田信輝入道勝入向ひて合戦を終
天正八年七月二日に落城し今に其跡存れ

三宮神祠 かうべ村にあり村中の産神とし生田八ケの内なり

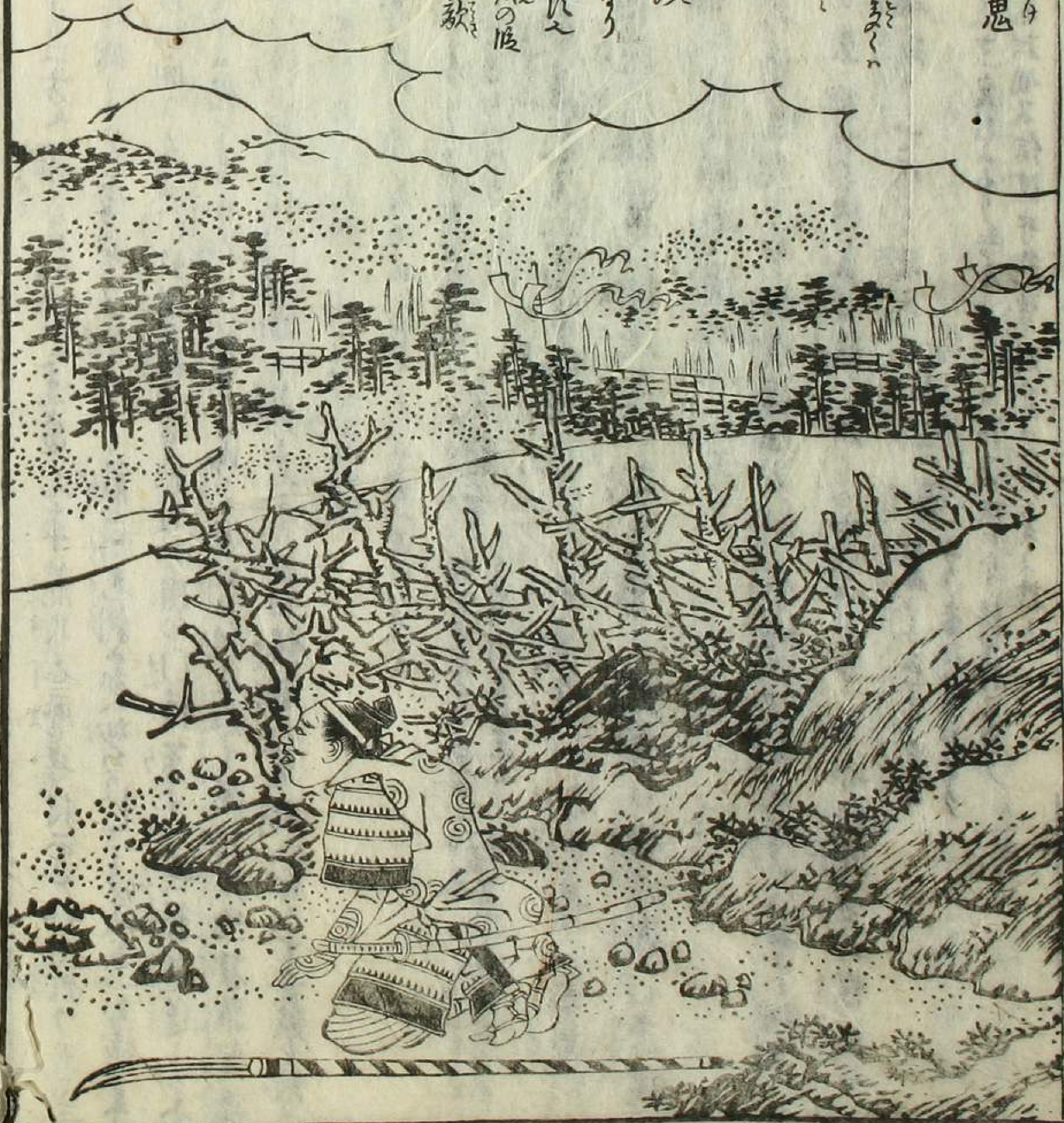
△多々部山 御所より二十丁計山高凌絶景いふ方なし **大龍寺** 古義真言宗本寺記のうち三月十八日観音会あり

堂如意輪観音菩薩二尊不動毘沙門 ○愛染堂 ○不動堂 ○稲荷社の傍にあり ○奥院大師堂 ○閼伽井 ○梵字岩 ○蛇谷 ○弘法瀧 ○糸掛やまにあり
の瀧ある皆弘法大師奇異の小説あり
○寺記曰神護景雲二年和気清麻呂初基地の観音を得て此寺を創造し
延暦年中の年弘法大師こゝに錫を掛く ○寛文年中南都招提寺の僧徒賢
正上人再建して今に及ぶ ○小屋場 多々部より入丁日のところより赤松の陣営なり

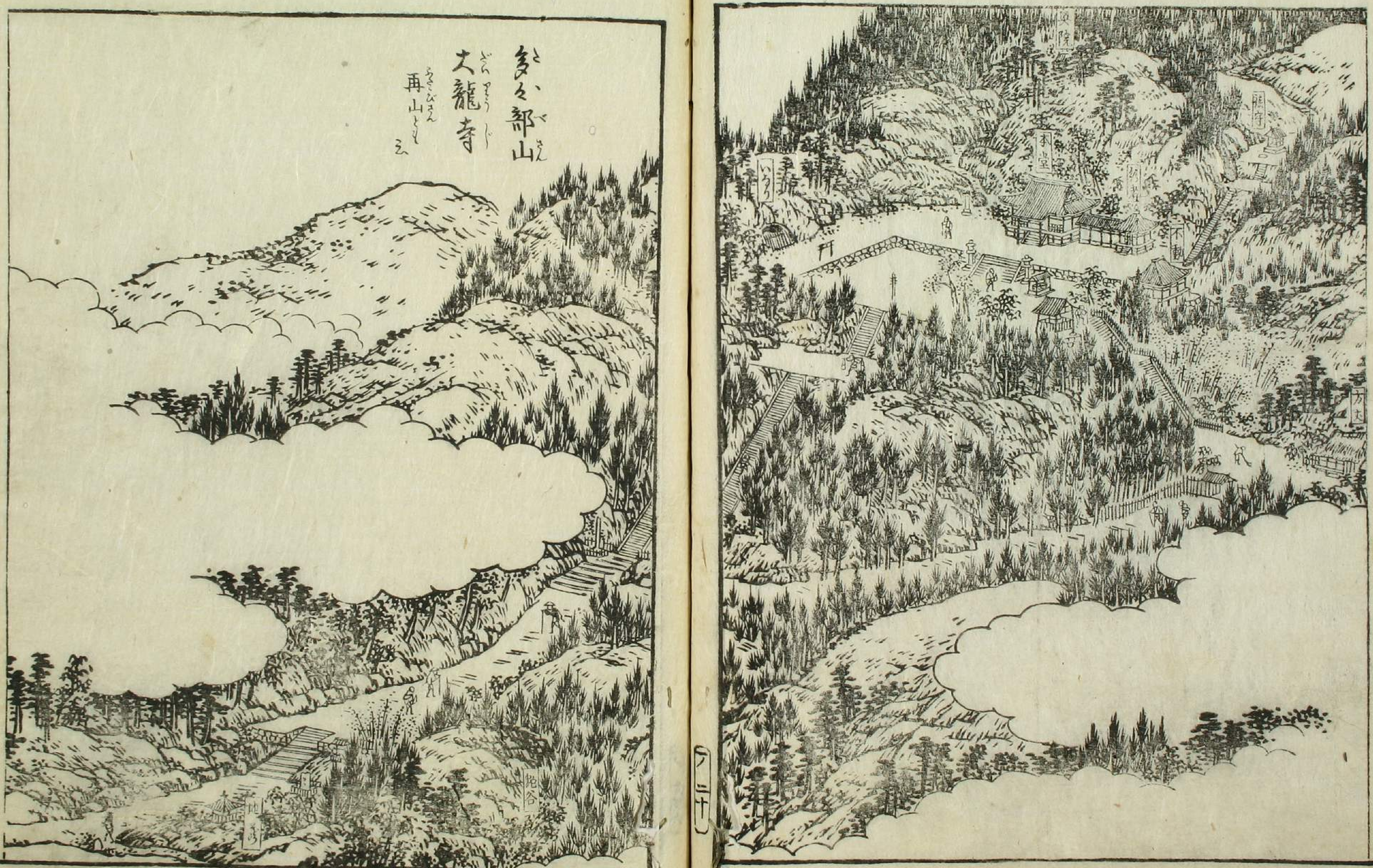
古城 多々部村なか宮村にあり丘の峯より小にいたる坂に寄合村にあり観応中赤松の嫡子信濃守範実則資足利家に攻る

梶原二度の蒐

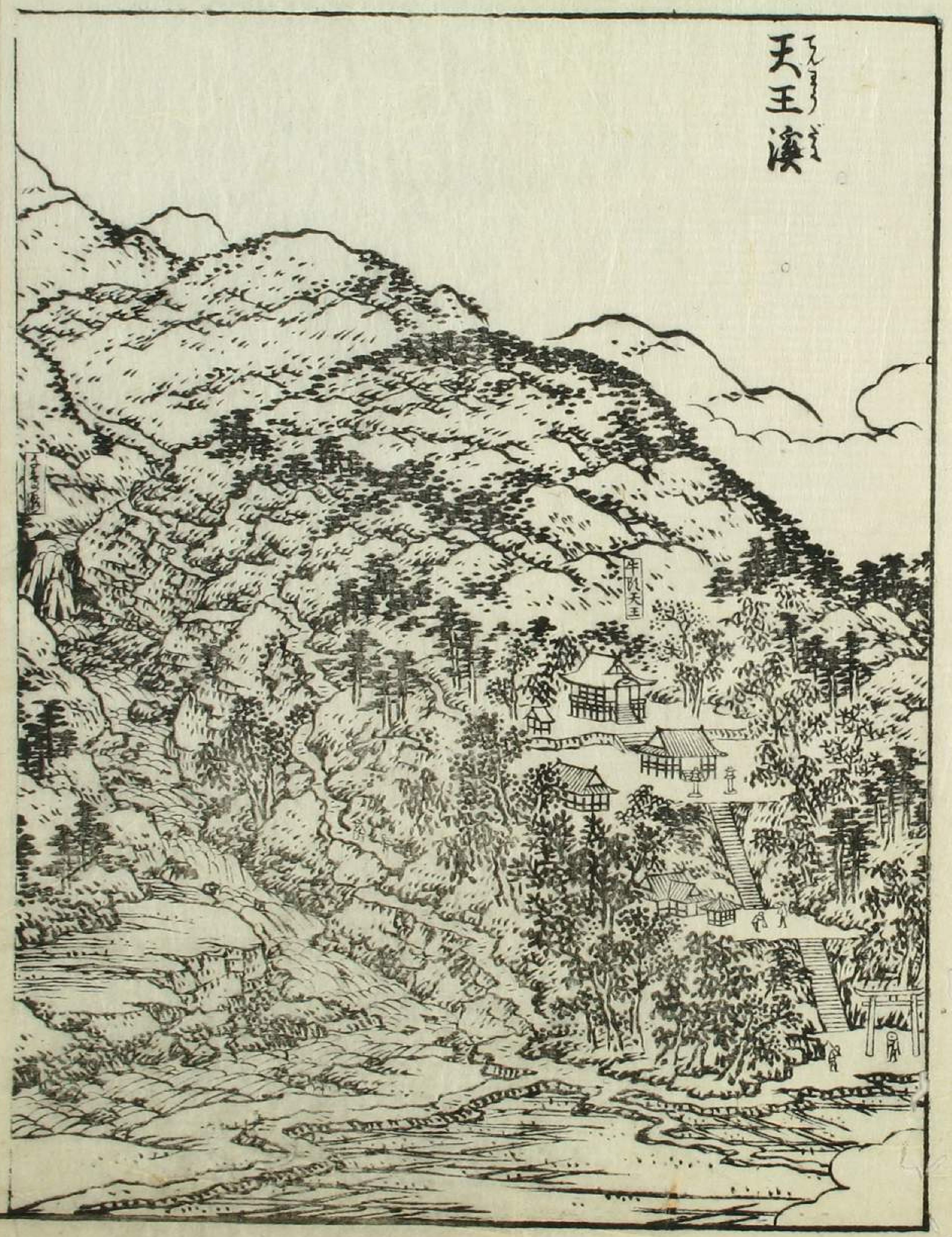
老人雑話云
箙にさされし矢の根は悉く
二十に之けり内一ツは矢だし
との様ひにて謂は
かくて射尽し二十三は
射ちらひて残る一ツ残
まつが箙のうちにあり
是扇まぜひ一ツは残之
平家物語橋合戦の所
二十四さしたる矢にて敵
二人射ころし十一人に
手を負せられしが
箙に一ツぞ残り
たりしは
是之を後箙に
とりて捨てたり
とは残りし
矢も射まさん



箙がらりとして
働きのさはりを
なすべきとき
とぞいえ
梶原が箙の
梅はまさしく
風流にあらず
矢を皆射ちら
ひて梅の枝を
さしてまぎらしたるを
諸めるなるべし


多々部山
大龍寺
再山とも云
奥院
鎮守
本堂
不動
方丈

烏原
からすはら
氷室明神


天王溪
てんわうだに
牛頭天王

楠正成
同正季
湊川戦死

山路古城　中宮村にあり赤松彦五郎則実の古城

〇大照山安養寺　坂本村にあり初めハ尾崎と号す然を当山大勝亮乃三の菩提所今に境内に乃三の墳あり

八宮六ツ宮　坂本村にあり生田裔神八柱の内之神なりこれを勧請す　六宮は宰の神と称し則に勧請す堂あり

雪見亭古跡　奥平野村にあり福原の都ありし時の清盛こゝに遊ぶところなり

天王渓天王社　奥平野村にあり此辺りを天王谷といひて丹生の山田より兵庫への道筋なり　また郡へのがれ兵の旅はあれども布引の瀧より行程難遠

千鳥瀧　こまく川の上石井村にあり　又鳥ともいふなり

祐子朝
石ばしる千鳥の瀧のおきてこそ これが藤紗人のたえとは見えけり

温泉古墟　石井村にあり　今は兵庫乃民家にあり此地に縁ありしもの

差方塚　荒田村にあり　塚に二株の木あり　平家物語に治承四年六月九日新都の事始として上卿御官人和田の松原西の野を點じて九重の地を割されけるに一条より下五条とありて是よりはなかりけり土御門宰相通親卿申されけるは三条の廣路を開いて十二の通門を立つと見えたり況や五条まであらん都になどか内裏立ざるべきと云郷一同に申されしかば平相国不興にてそみ見えざりけり　云云（出湯の目南に注し無之云々）

平頼盛山荘古跡　荒田村にあり　清盛の弟池大納言頼盛のやしきなり

源通親治承四年三月高倉上天皇厳島御幸の記にいへり

五月雨のころはたゞさへ北御のよつかせ給ふ都人のまゐるふことぞ何となく上下為方申の時に福原にはつかせ給ふ今一日も都へとくと上下心の内にはおもひつゝ福原の中御所にいらせ給ふ御楽ありて家被為御幸あり入道のさま態かる事にもみえ給うとの拜しるもてなしこそげにありがたく親盛の家にて笠かけやぶさめなどおこなはれまゐらせて御遊せさせ給ひ日暮てかへらせ給ふとぞ云云

平家物語
治承四年六月三日都遷りあるべきとて安徳天皇御三歳の御時御輿には御乳母帥典侍殿つかうまつられ御舅雲客公卿はじめ太政入道も参りて池大納言頼盛の卿の宿所は皇居となるとぞ云云

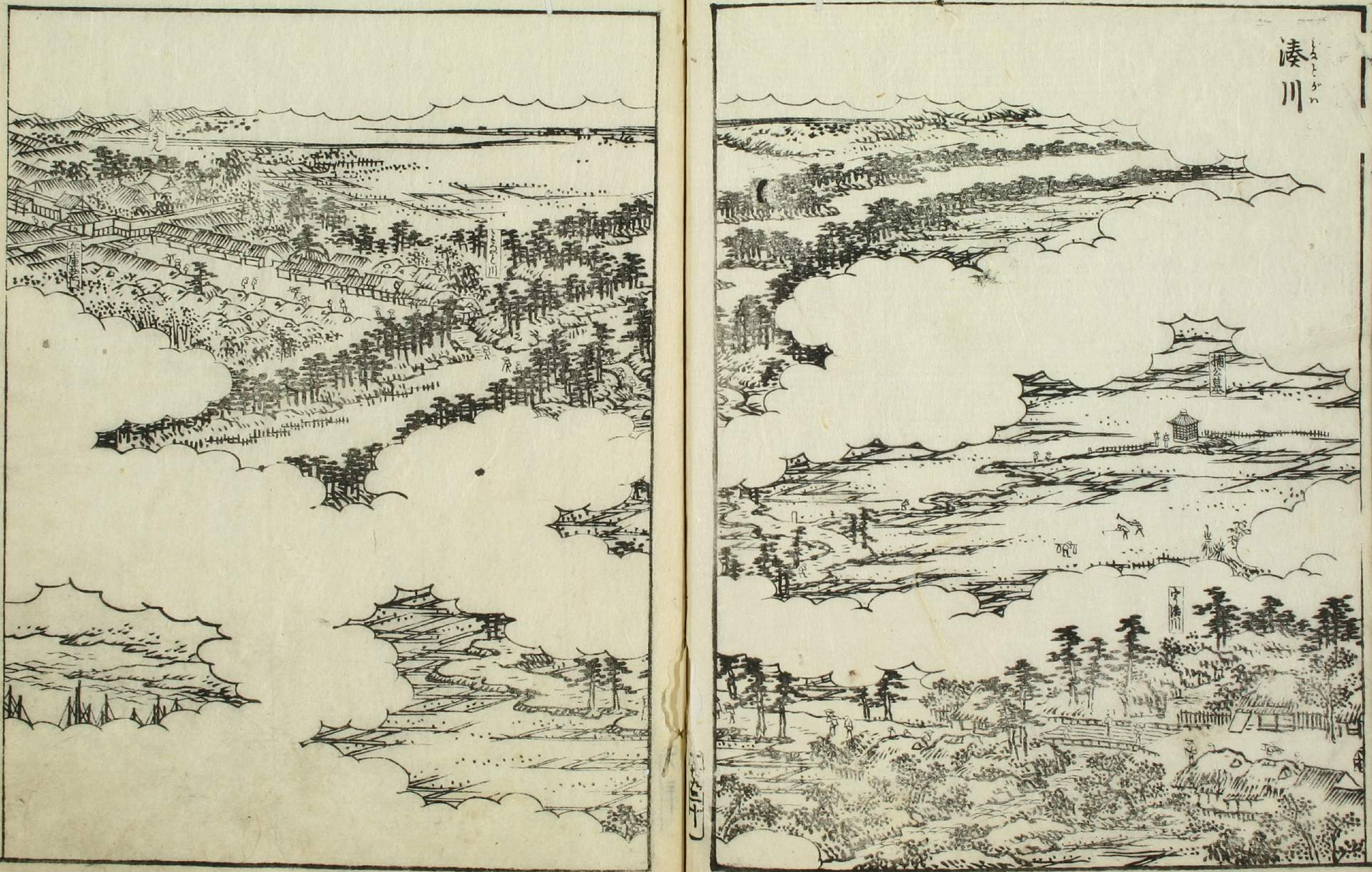
此日頼盛は後白河院文治元年六月出家して重蓮といふ

廣巌寺　坂本村にあり醫王山と号す楠正成の菩提所なり　本尊薬師如来　毘沙門天　正成の守本尊なり

開基は元亨元年大元国僧明極也〇建武三年五月廿五日楠正成の一族七十二人民屋に入て六間の客殿に二列に並び一同に切腹せしところ其遺骸を葬むりし今の石塔の地なり〇本堂の額藤原書

寺日開山佛日焔恵禅師明極和尚示寂建武三年九月二十七日

楠正成戦死建武三年五月廿五日四十三歳



湊川(みなとがは)

楠正成石碑

或曰正成が首ハ妻子に送らるゝの外久しく爰に埋け此寺に葬りしを記せる物此附の相なるや
坂本村興圖の中にあり永孫に年水戸黄門光圀卿の不遠して家臣佐々木助
三郎等に命じ村老のいひ伝ふるは此碑ハ一夜の内に瀧となく遷座して建語う
後に殺生より三間の小家をうけ是を覆ひ護りて始めハ塚上に松植ゆるのミ
○碑ハ和泉石を塔中石槨に囲繞一面を覆め楠正成霊像光圀遷立しあるしといふ
側の微士舜水の文あり摂州図会に出されば爰に略く

大日本史

楠正成ハ河内の人左大臣橘諸兄の裔之金剛山の西に居て家に楠樹多
し因て以て氏とし父ハ正康叔ハ某氏志貴山に祷て正成を生む山神
毘沙門なる故多門と呼べり元弘元年後醍醐帝小条高時の兵
を避けて以て笠置寺に幸し帝適夢あり是とて正成なるを奏
し即藤原藤房をさしてこれを徴さる還りて赤坂に務て兵を挙ぐ余
人を殺し此後錦織に沸湯の郷をひらしに死骸を焼て城を去り金剛
山にかくる及帝隠岐国に幸まる後赤坂を守る本定仏を降し湊
辺の橋に隅田高橋の数兵を溺死せしめ其後天王寺に兵縄を欺
き未来記を讀てかへりて綿水萬人なとのまをとさふあり後に小条己ろ
に及んで帝隠岐より還り正成京師に尊まり從るに延元元年

足利尊氏闕を犯し正成守治の大渡に出て帝叡山に幸し勝に乗りて
尊氏京師に入るに及んで僧数十人に語て泣しめ屍をとりかくさしめ
さまぐの計策をなして終に尊氏を西に走しめたり後しも尊氏直
義と共に大兵を水陸より引て兵庫にせまる義貞之を距む此時正成
に勅して兵庫に出て義貞を助しむ此時正成諫奏して云尊氏九州を
せめて軍勢盛なるべし我疲たる兵をもて恐くハ当るの能ハじ願く
ハ義貞と還て君ハ又山門に移し奉りなば尊氏京師に入べし其
時臣ハ河内に還り畿内の兵を招き河内より尊氏が粮道を絶て其疲を
と待ん然後義貞より攻ば一挙して退くべしと道理をせめて辞と
いへども帝かの廟謨とハ所坊門清忠が言につきて聞召入れざ
れば是非に不及湊川に戦死す

○賛曰楠正成の兵を用るハ機に変じて勝を制するハ孫呉にも似て忠勇
壮烈なるハ唐の張巡と相似たる之（張巡ハ安禄山と戦ひ討死せし忠臣なり）張巡雍丘を出て睢

陽を守るは正成赤坂を去て千破剱に據がごとし韓愈が謂所まづかる百の卒の次第に盡るをれて百万の勢の日々に濠をの師に戦ふ者あり寡をもって衆を撃ち奇策を出して窮じ廟謨不臧元凶旡接踵ニ至驕て呂使ひて正成がごとくものゝ言は却て用ひらゐざれは天に自一万里の長城を壊て敵の勢ひを強ふるがごとしされば何ぞ中貞の業をよりまさる嗚呼歎しき哉湊川の戦ひ正成自殺に臨んで弟正季の言を営などの今日までもかの張巡に似たり忠義の心は天地を窮め万古に亘りて泯びぬ身は死すといへども永く生るがごとし正行遂絶を受て継義旗を建先に節義を唱し死をもって国に報ずると謂べし忠孝両ながら全し其外宗属にいたるまで皆力戦して死しても節義を失はず一門不残忠義の鬼となるもの是みな正成の教をうけしの致ひ之

湊川 兵庫の山口にあり源は丹生の山田奥小部西小部藍那小河等の渓川三流合して石井村にいたりそれより下流兵庫の津にいたり海に入る此流れ少く水稚になりさりし右へは石井より懐下山の麓を西へながれ兵庫の山の西より大和田の浜にそゝぎ海に入る平相国兵庫の築島せられし時浩々の難を避んため今のごとく川ちがひ有りしと兵庫の湊に付て名つけられたるなるべし

夫木集 みなと川源の底にききうるあり生田の杜くみ秋の暮の数　範兼

湊山 川上鳥原村に在名所なりといへども未考 新勅撰に古歌ありといへども此山の歌もさくえだ

願成寺 往昔蓮坂烏原村にあり法然上人の弟子住蓮坊暫らく住て平重衡卿の室の菩提を弔ひしとぞ

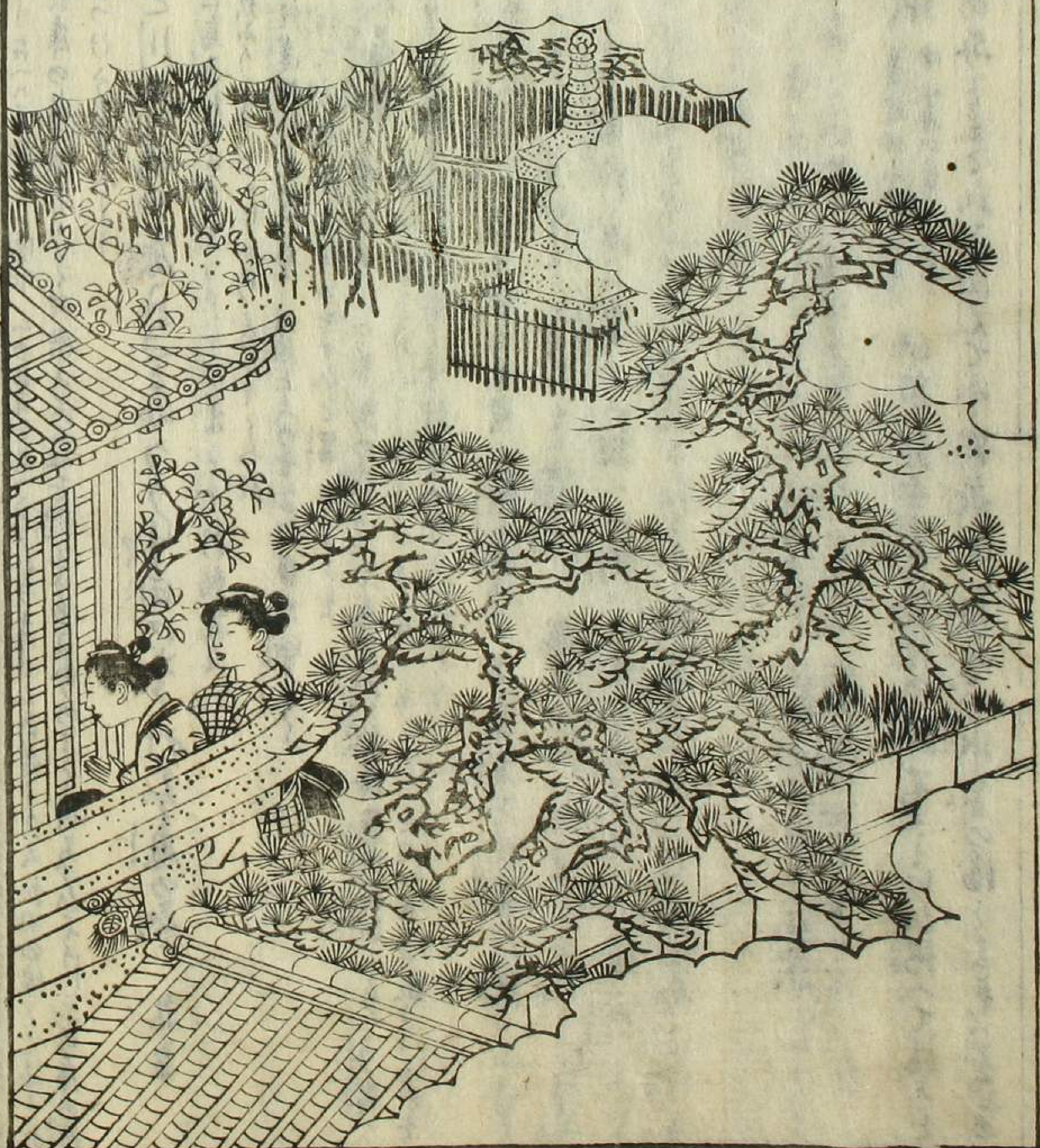
小宰相局塔 境内にあり平通盛卿の室なり越前三位通盛の内室なり寿永三年二月十四日此沖にて身をなげたり住蓮を請ませしとひとく今住蓮坂の名は残れり

夢野 みなと川の西山にあり 風土記に云昔に牡鹿あり其妻の牝鹿此野にあり背の上に草一茎生ひて其上に霜多く積りといふ牝鹿是を相して曰く矢を生ずるは箭幹身に貫くの相なり又霜は白塩宍肉に塗るの相なりつまをもひて他に走るものあれども牝鹿きかずして終に矢に中る故に後人て夢野といふ

○按ずるに夢は禁制の云にて是その瑞なるべし河内交野郡に禁野といふありて惟高らこの御狩場ありて故に禁野ともいへり風土記の説を信ずるかたし

夢野清水 夢野の中にあり 中山寺の旨にあり 此地は能登守教経の陣所なりといひ伝へて清水を陣場の井ともいふこれを汲んで今温泉とし俗呼で氷室の湯といふ是は夢野の

佐比江



氷室といふハを或書に浅り加しと又浅くふかうといふべし

○或書にいつハ菟我野ハ此地なりし事ハ日本紀に菟我野の鹿を若くの鹿に混じて
又ある本ありてより此墓我野の墓をつくよう語りてつげ野といふより氷室の名あるにも
つけて又諸よう菟我野ハ此地にてトガ野ハ大和に吉地ありつげ野ハ大和なり氷室と
大和乃つげ野にあり

鵯越 菟我野より南二丁坂口より播磨三木の室への路なりたやすく越ゆるゆゑとぞ

會下山 一名延喜山といふ兵庫の地よりすゝめ十三丁の平山也延喜年中に築出せし所也

神馬松 和田の地にあり神功皇后三韓より帰朝の御時龍馬をもちよつて此所の人松を真に此
加例より今に山城国男山の八幡宮の神馬の松ハ寔よりなすなりといへり

兵庫津 一名論田の浦又大輪田武庫の浦 武庫の浦より兵庫の町名昔ハ官の国方
南濱小濱の別ちあり 摂州大坂よりまはる事むかし兵庫の津ハ是より西也の
山より道て濱邊まで町ひきうつして多く 大坂よりの船荒室に泊る東南
漁村に船乃停家之播州入津異實ハ天正に居る辺
の風を除き涯の南百歩許を濃之○此海の底に洲あり長くして
菟原郡深江浦に連る毎年三月潮涸る時此洲見はるゝなり
天長八年 淳和天皇の御時 三月入唐僧の船と此澳に泊り津の南の海中に出る
ところの先これ古への御湊といひて大和田の古堤之水涯甚深し
て十二三尋ありて船舎の最良る所也

新千載
夕づく日まぐれぬと漕舟のゆくゑもしらずやむこの浦風　入道前太政大臣

兵庫といふ地名のゆゑは俗傳に神功皇后三韓攻の時此所に兵具の庫を建給ひし故に号くと云

或曰むかしへ去りて又京の者をんで地名ともなりしと見えたり即兵庫の地を川口より見上れば山つきて南へめぐり兵庫は其内の泊なり○日本紀神功皇后三韓帰洛の時皇后の舟まつすぐに難波をさして行給ふに船海中に巡りて務古の水門に還るといふ今の兵庫の湊なるべし　古書に兵庫を武庫と書しもさきの武庫の湊といふにてしるべし

夫木
住吉の恋わすれ草さちて見ん渡せばむこの浦とつづる舟びと　よみ人しらず

佐比江　上古より入江にして佐比江と名づくるにあらずして深からぬ江とさび江といふ也

此地新地となりて其名のみ残れり

若狭守経基墓　佐比江より小に有り平相國清盛の次男なり

築嶋　一名経が嶋

鎌倉実記
平相國清盛此地を築くる事は民の煩ひを省り兵威に誇る悪行あまた積れども末代天下の宝となりて諸々入口田地となり人家も増長し諸國の船のよるべとなり易く其の功実に君の名とぞ申しけり柳は築く所の余れる材は和田が崎難波浦は往還の海門天下運送の要津なり

平家の勢威萬國に及ぶといへども東國の八平氏関東の一族に恐あり宝をうばひて清盛ふかくおもひて京畿をとるの要害の府城をうつし子孫長久の地と営みて小津國福原より勝れたるはなしたとへ君臣の礼に背くとも中國西國の人々さへ心よりつかふる須磨関を堅め其の奈良山湊の大城戸を閉て船路の通路をとどめんとせんとなれば兵庫は難波湊とも舟の泊悪しきは何れの所にいつもこの風にも堺ぐ是に依て鳴門の浪を切て湊を築きて兵庫を湊となし難波の入江の高洲を掘流し江口神崎へも比く御船を入浪の長柄を出て摂河両國の水路をよくし淀一口より河内の沼地も干拓して田畑に利あり淀川の流をよく利せしむる瀬の往還としより蔵門の御門昌天下の宝湊となし先を阿房氏國が蒙国方便を取り

築の忠次郎　紀伊守ならびに門司の藤内兵衛紀伊國鄭景則を奉行として長門周防丹波播磨紀伊和泉より役夫を出させ飛驒匠本居の杣方より内裏の法科なりの正税といふも御家の人々の外に十分一の課役を充て不日に成就せんと

應元元年二月八日に築そめしが兵庫の東に八月まで大風大波起て一夜に堤を洗ひ流したり方々をなげきて又三年の孫生阿波民部重能を奉行として終に成就すと云

○人柱の事は又義因の関所にいつよ及びし三月廿八日より一日一夜に一村で是非と定め人を捕め捕へて築嶋の柱となれとしとよべて奉行の官人諸役人大工雑治

石工船役の者まで其職をなさゞるものは因て人柱の数に入んと進ぜさ
れ觸流させらる是は全く工役の者に怠りさせまじきの計略にして
進めて因らるゝと云ふ。諸書に此法なし 平家物語には人柱の
代儀はつまゞとも罪業なるべきとて石に經文を書て築かれしとぞ
これ經が嶋の名をのこされしが松王小児の事は證する書にもなく只人柱は罪
業とあり經の功力をかりたるなれば松王が事実ともいひがたし觀る
房卿の為に人柱となれる心の柱也

よしなしのつくり柱もつよくしがらみへざしめや玉のゆらぎぐさ

いよく人柱のみ清盛が旨一ツにありて大功はなしたる其勢ひにあらざれば
何か及ぶべき事乃何らん実に莫大乃講業也○今兵庫の里俗清盛様
つひとつとふれむべなり

砂礫北風 近国の名産也一説にキフキ乃北風の家にへむかできたとつたへさて北風とよぶ又百年斗お鐵の家ある
よしいかゞ家譜あり義貞の感状あり其書を譲りて家に男たり

能福寺 逆瀬川町にあり 天台宗 開基傳教大師 中興良暹和尚字猿山と号す 本尊薬師如来

觀音堂 本尊はぞうえ奥乃御室の本尊なかりとふ

真福寺 は附 本尊如意輪觀音 江州石山にありての本尊と同木新難公の建立
袱王祇女が家に住しとかや

輪田岬 和田の社より辰巳の方八町斗海面の湊中築出して並木松数十株を植えたり

是兵庫津第一の要所也即清盛の築く所西方の風波を防ぎ鳴門の
汐先を除きて寰に万艘をとゞむる也又は月を賞して舞宮集り
鉄内無双の勝地也今の岬は清盛の築し所には勝まさり今は年々
洲渚をのぞり出て長くなる也是自然の理あり明石藤岡に似たり

和田神祠 和田のさきにあり南濱の古祠とし例祭は八月廿三日
兵庫能福寺兼帯の社なり

和田三石 三ツ石の社は和田新田にあり
和田の社乃南 丸池田中にあり
一名扱戸塚ともいへり古名なるべし 新田の社は古地の扱戸の眞こゝろ濱瀬はいづくと
ならしものより三ツ石は大津石の湊なるべし

燈籠堂古跡 本福寺の南和田が岬の内にあり建武の比尊氏築紫より
上る時尭馬内氏焼篝灯の古法を津守にも古へ也

傍云 山城入道は和田のさきに燈籠堂を建て持經者を人集て万燈
會を行ひ給ふ今は退轉して石ども乃跡ありとぞ 云云

夫木集 かゞげつゝ和田の岬乃灯は船のとのりしるしなりけり

此燈籠堂のことは平家物語盛衰記源平鎌倉実記などに見えたる所也云燈籠堂の名を
義貞津で和田の岬にあるとは文中にえたれども佛場の事ありがいわれる其功ぐ

松王小児

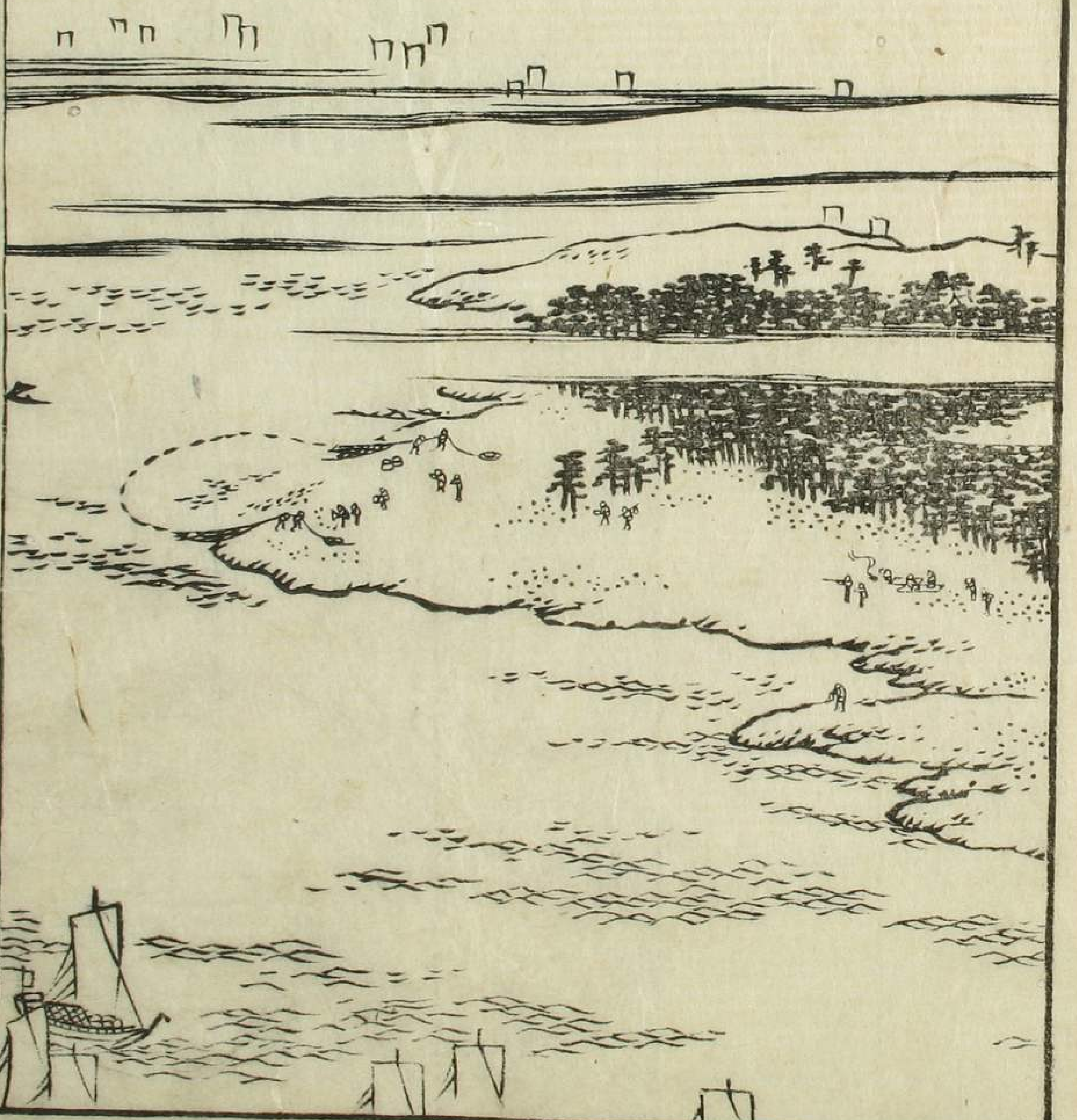
其二

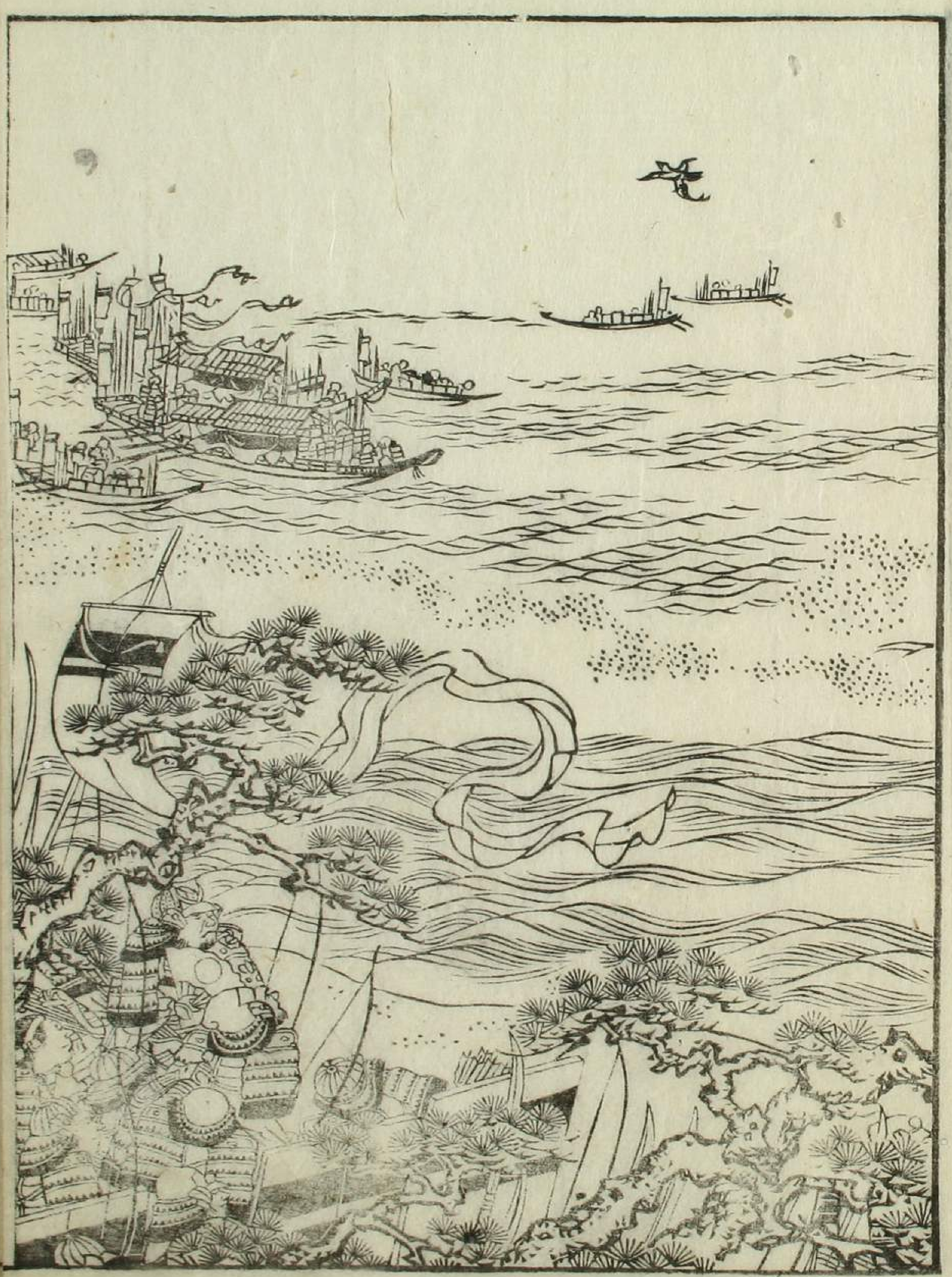
和田乃岬

弔本間蓮覚

新田足利ね
雌をいまだ
戦ハざる前に
本間孫四郎
重氏和田乃
御崎より馬打
よせこ大なる鯛
をあげしかバ
味方軍勢
より沖上渡へ
むかへて鞆尾
の尾の傾城とも
多く見せ
ら連ける

其やさに能く
しき御肴一ツ
進らせ候さん
まづもく御請
取とらふまでよ
とて遠くより
ある騰の浪か
上藤さげて
二尺斗なる鯛
の鰭をつかみ
て沖の方へ
投げるを小松
かの中より
騎馬をかけ出
進さまみせ
ける
鮎ハ鰭を握
るが大なる
船のやうなり





とへて落けり
の敵味方十万
騎ひしくと
感ずる声天地
とぞ響きしが
敵より其名を
問ひければ我こそ
までも名乗り
殊へとて十文字
三つぶせゆらりく
と引きて
二つ引両の
船をさしてく
射ければ
其の間六丁
余の波を越して
将軍の
船の主にぞ
当りけり云

和田小松原　東は兵庫の町はづれより西は東尻池村まで一面の松原にして絶景なり。摂津国名所にいふ小松原是なり

内裏跡　東尻池村松林の中より方一町ばかり溝尚存せり。○治承四年安徳天皇教盛が山荘を皇居として同月九日新内裏に行幸ありしは是なり。同年

福原旧都

東雲集　福はらや古き都を来て見ればちよにしや鳴けるらん

兵庫の地は福原の荘といふ所にて福原の内裏と云ふ。應保年中平相国清盛入道の所領として此地に内裏を経営し、治承四年六月二日安徳天皇（三歳の御時）此都へ遷幸なる。池大納言頼盛の山荘を皇居とし（荒田村に古跡あり）公卿百官悉く供奉し奉るとはいへども額を(?)ぬ者はなかりけり。然るに九月に至りて諸国謀叛の者ども多きよし訴へければ、福原の都もいつまでと恐れ給ひければ、十二月二日俄に旧都へ還幸なりけれども内裏は既に毀ちなむとしけるを、主上を始めまゐらせて公卿の家もなかりければ只路道に立よりたまふ。さまざまに方なく数(?)して住せ給ひける。○其古跡は上皇は津海が

別荘を牢御所とし法皇は教盛の別荘に押しこめまゐらせる是清盛が我侭邪道によるなり

平家物語云 都を福原へうつされて後は入道の夢見もあしく、或夜一間にはばかる程の物の面出来てのぞきける。或時入道端を眺めて見れば坪の内に死人の髑髏いくらといふ数もしらず積みて、後は十四五丈もあらん大頭の目を開き入道をにらむ。又白眼に馬の尾に鼠巣をくひ子を産むなど種々の物怪あり

西行家集　福原へ都うつしありと聞えし比伊勢にて月の歌よみ侍りしに

雲のうへやふるき都になりにけりすむらん月の影はかはらで

○続古事談云 平相国入道福原の京をたてゝ皆うつりぬ。後車の外はわづかに故京の守を残せんとて古京に残りける人々も皆呼くだしけるに、人々入道の心を恐れてくだりけれども、かなしみ長う御ひとりかたしも心をよせず此京を荒しすてて、はや押しまぬ数こそなかりけれ。さてもとの京のよき所をえらびて後にそれ日の役人の定めよりも古京へ入るべき縁に赴りなり。後に其座にのぼる上達部の長方にあひてとひて、たてたる京をも、なほさほしうまゐるべきさがりの悪人のいとしとおもひて、たてたる京をもとはいかにいひ返しぞ、いひ押しむけて帰京の後あまりなどこそいはずなれ

そらだちせばいでし給はまじと云ひければ此君は似ざる義之入道の
心なるなりんとぞこそさいつひしが其故は廣く漢家本朝を考ふるに
ぬ影家と行ひするものたじめよそひ立をりは人といひ合せるなし其へ至ま
ざかしくやむ心みそうれ人すは向へ先も後京の外よりきて後西京の
さたの行ひしかば又じるすくやしう静りにそりとつふがをありとききされば心じ
かは言葉を押しもべきとぞいはまるる勝に其後に人々の誠らまさんとしける
時も此入道すぎ紀せらるにて長方卿は事の外に物を先へさる人とさやもとく
人に語しもべらんとて後を此人と賞せらるまるる橋本中納言の安京
の実めともく其時乃人の口にのみたりと云云

真野

真野浦　真野池　真野里　真野継橋　真野榛原

是萬葉集の古詠多し今東尻池の内に其古名を存てとは又ども實は今さ
とそのことくも云ひもべく此兵庫の古跡より西の廣き野をいふべし猶るに諸書
国名の混雑多し殊に此蛙かはは

真野浦 真野入江は　近江
真野の浦の継橋は　摂州
真野の榛原は　大和
真野の萱原は　陸奥

かく悉く其ましぬるまへるたがひ給ふなり

○萬葉集第三

高市連黒人歌二首

まきもこに猪名野はみせつ名次山角の松原いつかしめさん

いざ子どもやまと人よく白菅の真野の榛原手折てゆかん

黒人妻の答歌一首

白菅の真野の榛原ゆくさくさ君こそ見らめ真野の榛原

是も皆のくよみしたりて黒人は大和の都の朝の人なり任にありて津の国に往来
の歌なり行くさくさは往還の義なり

萬葉集

真野の浦の淀の継橋こころゆも思ふやいもがゆめにしみゆる

同

真野の池の小菅を笠にぬはずして人の遠名を立つべきものか

参議刺史平知章墓

尻池村の北上街道の東側にあり詩記の不れ此の五輪なりしが享保年中並河氏摂津志編集の時さとくに巡行し此のごとく石表を立らく
文ま代まで詩記し後に其墓名を表し五海道往還の側今の地に移たる
往来の行人家居隣物古郎と共に其忠孝嘆せしめんとなしたるとぞ

知章は新中納言知盛の子也知盛一ノ谷落城によりて濱へ向ふて落行ふ児玉党是
に追付て打てかかるに新中納言危く見へ落人は術子武蔵守
知章中に隔り引組で馬より落て互に推へ敵の首を擢切不へつ敵の

童ども落重りて終に知章を討てけり又知盛の侍監物太郎ハ其童を討て腰搔切て自殺を遂る其餘に知盛ハ井上といふ名馬に打乗り就中の土期監物が自害ありしと見て海上三丁計游て船に乗移りて落られける

監物太郎頼賢墓 知章が墓の小田中にあり 是も其後氏の建る所

監物ハ知盛が侍也御子知章討死給ひければ落合童どもの首を切て忽ち主君の仇を報じ御首に童どもの首を引さげ馬に乗んとせしが馬の腰節を討られて今ハかなはじとおひ腹かき切て死しけり

越前三位通盛墓

知章の墓の少東の松に又本塚あり盛衰記云越前三位通盛ハ湊川の端を下りに落られしが木村源吾成綱と組で討死し給ひしといへり又平家物語云通盛卿ハ山の手の大将軍にて打出しが其勢皆落失て討死せられしとぞ西小宰相の局の後に君ハ今朝湊川にて討死させ給ひぬと告ありしと云々摂津志に平通盛墓ハ佐比江の北にありと書り今此本を見るに一本の平家物語の文に依りて土書るなりのとさへ初めはつくりむかしの湊川ハ山の林麓を巡りて庄池村の東に流れて海に入しと云へば通盛卿の墓も佐比江にはあらじ

木村源吾重章墓

通盛墓の側池の中にあり源氏の武士近江国の住人木村源吾重章ハ平通盛と組て突に討死しける由平家物語にみえたり

苅藻川 右塚の西街道の小川也源平勝誠より長田を経庄池にて海に入る

平家物語 平重衡湊川苅藻川をも打渡り蓮の池を右手に見て駒の林を左手になし板宿須磨をも打過て西をさして落給ふ

播磨名所巡覧圖會巻之一終